

インドラの網

宮沢賢治

青空文庫

そのとき私は大へんひどく疲れていてたしか風と草穂との底に倒れていたのだとおもいます。

その秋風の昏倒の中で私は私の錫いろの影法師にずいぶん馬鹿ていねいな別れの挨拶をやっていました。

そしてただひとり暗いこけももの敷物を踏んでツエラ高原をあるいて行きました。

こけももには赤い実もついていたのです。

白いそらが高原の上いっぱいに張つて高陵産の磁器よりもっと冷たく白いのでした。

稀薄な空気がみんみん鳴っていましたでしたがそれは多分は白磁器の雲の向うをさびしく渡つた日輪がもう高原の西を劃る黒い尖々の山稜の向うに落ちて薄明が来たためにそんなに軋んでいたのだろうとおもいます。

私は魚のようにあえぎながら何べんもあたりを見まわしました。

ただ一かけの鳥も居ず、どこにもやさしい獣のかすかなけはいさえなかつたのです。

(私は全体何をたずねてこんな気圈の上の方、きんきん痛む空気の中をあるいているのか。)

私はひとりで自分にたずねました。

こけももがいつかなくなつて地面は乾いた灰いろの苔で覆われところどころには赤い苔の花もさいていました。けれどもそれはいよいよつめたい高原の悲痛を増すばかりでした。そしていつか薄明は黄昏に入りかわられ、苔の花も赤ぐろく見え西の山稜の上のそらばかりかすかに黄いろに濁りました。

そのとき私ははるかに向うにまつ白な湖を見たのです。

(水ではないぞ、また曹達や何かの結晶だぞ。いまのうちひどく悦んで欺されたとき力を落しちやいかないぞ。) 私は自分で自分に言いました。

それでもやつぱり私は急ぎました。

湖はだんだん近く光つてきました。間もなく私はまつ白な石英の砂とその向うに音なく湛えるほんとうの水とを見ました。

砂がきしきし鳴りました。私はそれを一つまみとつて空の微光にしらべました。すきとおる複六方錐の粒だったのです。

(石英安山岩か流紋岩から来た。)

私はつぶやくようにまた考えるようにしながら水際に立ちました。

(こいつは過冷却の水だ。氷相当官なのだ。) 私はも一度このころの中でつぶやきました。

まったく
全く私のてのひらは水の中で青じろく燐光を出していました。

あたりが俄にきいんとなり、

(風だよ、草の穂だよ。ごうごうごうごう。) こんな語が私の頭の中で鳴りました。まっくらでした。まっくらで少しうす赤かったのです。

私はまた眼を開きました。

いつの間にかすつかり夜になってそらはまるですきとおっていました。素敵に灼きかけられてよく研かれた鋼鉄製の天の野原に銀河の水は音なく流れ、鋼玉の小砂利も光り岸の砂も一つぶずつ数えられたのです。

またその桔梗いろの冷たい天盤には金剛石の劈開片や青宝玉の尖った粒やあるいはまるでけむりの草のたねほどの黄水晶のかけらまでごく精巧のピンセットできちんとひろわれきれいにちりばめられそれはめいめい勝手に呼吸し勝手にぷりぷりふるえました。

私はまた足もとの砂を見ましたらその砂粒の中にも黄いろや青や小さな火がちらちら

またたいているのでした。恐らくはそのツエラ高原の過冷却湖畔も天の銀河の一部と思われました。

けれどもこの時は早くも高原の夜は明けらしかつたのです。

それは空気の中に何かしらさらさらしい硝子の分子のようなものが浮んできたのでもわかりましたが第一東の九つの小さな青い星で囲まれたその泉水のようなものが大へん光が弱くなりその空は早くも鋼青から天河石の板に変わっていたことから実にあきらかだつたのです。

その冷たい桔梗色の底光りする空間を一人の天が翔けているのを私は見ました。

(とうとうまぎれ込んだ、人の世界のツエラ高原の空間から天の空間へふつとまぎれこんだのだ。) 私は胸を躍らせながら斯う思いました。

天人はまつすぐに翔けているのでした。

(一瞬百由旬を飛んでいるぞ。けれども見ろ、少しも動いていない。少しも動かずに移らずに変らずにたしかに一瞬百由旬ずつ翔けている。実にうまい。) 私は斯うつぶやくように考えました。

天人の衣はけむりのようにうすくその瓔珞は味爽の天盤からかすかな光を受けま

した。

(ははあ、ここは空気の稀薄が殆んど真空に均しいのだ。だからあの繊細な衣のひだをちらつと乱す風もない。) 私はまた思いました。

天人は紺いろの瞳を大きく張つてまたたき一つしませんでした。その唇は微かに晒いまつすぐにまつすぐに翔けていました。けれども少しも動かず移らずまた変りませんでした。

(ここではあらゆる望みがみんな浄められている。願いの数はみな寂められている。重力は互に打ち消され冷たいまるめるの匂いが浮動するばかりだ。だからあの天衣の紐も波立たずまた鉛直に垂れないのだ。)

けれどもそのとき空は天河石からあやしい葡萄瑪瑙の板に変わりその天人の翔ける姿をもう私は見ませんでした。

(やつぱりツエラの高原だ。ほんの一時のまぎれ込みなどは結局あてにならないのだ。斯う私は自分で自分に誨えるようにしました。けれどもどうもおかしいことはあの天盤のつめたいまるめるに似たかおりがまだその辺に漂っているのです。そして私はまたちらつとさっきのあやしい天の世界の空間を夢のように感じたのです。

(こいつはやつぱりおかしいぞ。天の空間は私の感覚のすぐ隣りに居るらしい。みちを

あるいて黄金いろの雲母のかけらがだんだんたくさん出て来ればだんだん花崗岩に近づいたなと思うのだ。ほんのまぐれあたりでもあんまり度々になるとどうとうそれがほんとなる。きつと私はもう一度この高原で天の世界を感ずることができ。私ひとりで斯う思いながらそのまま立つておりました。

そして空から瞳を高原に転じました。全く砂はもうまっ白に見えていました。湖は緑青よりももつと古びその青さは私の心臓まで冷たくしました。

ふと私は私の前に三人の天の子供らを見ました。それはみな霜を織つたような羅をつけすきとおる沓をはき私の前の水際に立つてしきりに東の空をのぞみ太陽の昇るのを待つているようでした。その東の空はもう白く燃えていました。私は天の子供らのひだのつけようからそのガンダーラ系統なのを知りました。またそのたしかに于大寺の廃趾から発掘された壁画の中の三人なことを知りました。私はしずかにそつちへ進み愕かさなないようにごく声低く挨拶しました。

「お早う、于大寺の壁画の中の子供さんたち。」

三人一緒にこつちを向きました。その瓔珞のかがやきと黒い厳めしい瞳。

私は進みながらまた云いました。

「お早う。于コウタン 大寺の壁画の中の子供さんたち。」

「お前は誰だれだい。」

右はじの子供こどもがまつすぐに瞬またたきもなく私を見て訊たずねました。

「私は于 大寺を沙すなの中から掘ほり出した青木あおき晃あきらというものです。」

「何なにしに来たんだい。」少しの顔色もうごかさずじっと私の瞳ひとみを見ながらその子はまたこ
ういいました。

「あなたたちと一いっしょ緒にお日さまをおがみたいと思ってです。」

「そうですか。もうじきです。」三人は向むこうを向むきました。瓔ようらく珞らくは黄だいや橙だいみどりや緑はりの針はりのよ

うなみじかい光を射いうすものにし
羅らは虹にじのようにひるがえりました。

そして早くもその燃もえ立った白金はくごうのそら、湖みづうみの向むかうの鶯うぐいすいろの原はらのはてから熔とけたよう

なもの、なまめかしいもの、古ふるびた黄金くわんごん、反はん射しゃ炉ろの中の朱しゆ、一ひときれの光るものが現あらわれ
ました。

天の子供らはまつすぐに立つてそつちへ合あ掌しょうしました。

それは太たい陽ようでした。厳おごそかにそのあやしい円まるい熔とけたようなからだをゆすり間もなく正
しく空のぼに昇のぼった天の世界せかいの太たい陽ようでした。光は針はりや束たばになつてそそぎそこらいちめんかちか

ち鳴りました。

天の子供らは夢中になつてはねあがりまつ青な寂靜印の湖の岸砒砂の上をか
けまわりました。そしていきなり私にぶつつかりびつくりして飛びのきながら一人が空を
指して叫びました。

「ごらん、そら、インドラの網を。」

私は空を見ました。いまはすつかり青ぞらに変わったその天頂から四方の青白い天
末までいちめんはられたインドラのスペクトル製の網、その纖維は蜘蛛のより細く、そ
の組織は菌糸より緻密に、透明清澄で黄金でまた青く幾億互に交錯し光つて顫
えて燃えました。

「ごらん、そら、風の太鼓。」も一人がぶつつかつてあわてて遁げながら斯う云いました。
ほんとうに空のところどころマイナスの太陽ともいうように暗く藍や黄金や緑や灰いろに
光り空から陥ちこんだようになり誰も敲かないのにちからいっぱい鳴っている、百千のそ
の天の太鼓は鳴つていながらそれで少しも鳴つていなかったのです。私はそれをあんまり
永く見て眼も眩くなりよろよりました。

「ごらん、蒼孔雀を。」さっきの右はじの子供が私と行きすぎるときしずかに斯う云い

ました。まことに空のインドラの網のむこう、数しらず鳴りわたる天鼓てんこのかなたに空一ぱいの不思議ふしぎな大きな蒼い孔雀おが宝ほう石せき製せいの尾おばねをひろげかすかにクウクウ鳴きました。その孔雀おはたしかに空には居おりました。けれども少しも見えなかつたのです。たしかに鳴いておりました。けれども少しも聞えなかつたのです。

そして私は本ほん統とうにもうその三人の天の子供らを見ませんでした。

却かえつて私は草穂くさほと風の中に白く倒たおれている私のかたちをぼんやり思い出しました。

青空文庫情報

底本：「インドラの網」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年4月25日初版発行

1996（平成8）年6月20日再版発行

底本の親本：「【新】校本宮澤賢治全集 第九巻 童話1【#1】はローマ数字、1-13-2

1】筑摩書房

1995（平成7）年6月発行

入力：浜野智

校正：浜野智

1999年1月31日公開

2011年2月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

インドラの網

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>